

講義理解に必要な現代史を扱う日本語教室活動の試み

福島 智子・伊古田 絵里・太田ミユキ

要 旨

留学生にとって講義理解が困難な原因の1つに歴史に関する知識の不足があると思われる。筆者らはこうした問題の解決の一歩として、2009年度より3学期間、「講義を聞き取る」「既存知識と結びつける」ことを主眼とした現代史を扱った教材を開発し、教室活動を行った。教材は、歴史教科書の重要語から説明文を作成し、その説明文を基に、用語の種類を知る、説明を聞きながら用語を書き取る、用語の読み方を正確に覚える、地図で地名を確認する、現代生活との結びつきを知り現代の社会問題を考える等のポイントを取り入れて作成した。それらによって、用語の意味の推測力、講義での聴解力、固有名詞の正確な理解、現代社会へのより深い問題意識を高めることを目的とした。その結果、用語理解や類推力が高まり、学生からも肯定的な評価が得られた。しかし、教材や活動の検証が必要であること、調査方法などの面で課題が挙がったため、今後はこれらの課題を改善させていきたい。

【キーワード】 講義理解、日本語、留学生、現代史、中国

1. はじめに

留学生にとって、専門科目での学習や研究を円滑に進める上での障害となっているものの一つとして、歴史に関する知識の不足があると考えられる。来日前に歴史の学習経験はあるが、日本で一般的に扱われる歴史に関する名称や内容が自国で学んだものと差異があり、日本での学習内容と結びつけられないために、知識がない場合以上に、混乱を招く可能性があり問題は深刻である。それにもかかわらず、留学生を対象とした歴史学習の支援は整っているとはいえ、多くの留学生から「困っている」などの声を聞く。ゆえに、留学生を対象とした授業で既存の知識と結びつけられるようにする支援が求められる。

特に近現代史の事柄は、歴史のみならず、広く様々な分野の講義で常識として使用されることが多く、また、現代社会を理解する上での前提知識としても重要である。実際に2007年に大学で専門科目を担当する教員を対象に地理歴史に関する調査を行ったところ、第一次世界大戦、第二次世界大戦、冷戦、戦後など近現代が専門科目を理解する上で重要だという回答が多かった。

本研究は上記を踏まえ、歴史学習の支援ではなく、講義理解の支援という視点から、講義を聞き取ることと既存知識と講義内容を結びつけることを支援の目的として近現代史の情報を取り入れた教材を作成し、教室活動の実践を試みた。教室活動は、桜美林大学日本

言語文化学院において行った。桜美林大学日本言語文化学院（以下、留学生別科）は日本の大学・大学院・専門学校への進学を目的とする留学生のための予備教育機関で、週15コマ（1コマ90分）の日本語の授業が行われている。本実践は上記の15コマのうちの1コマである「ニュースで学ぶ現代日本」という科目において、世界史の分野を扱った教室活動を、2009年度前期と2010年度前期の2学期間、日本史の活動を、2011年度前期の1学期間行った。この科目は、現代日本事情、日本社会のしくみを学び、社会問題や時事問題についての調べ学習、発表、意見交換を通して、自分の考えをわかりやすく述べる力を身につけることを目的としている。

それぞれの活動は、前年の活動を改善させており、2011年度においても、扱った分野は異なるが、世界史での課題を反映させ、かつ「日本史についても知りたい」という学生の声に対応して行った。

本稿は、3学期間の実践の過程を振り返り、今後の支援の方法を探るものである。以下、世界史と日本史の活動に分け、実践の内容を詳しく述べ、そこで明らかになった課題から今後の実践の進め方について検討したい。

2. 世界史の分野を扱った教室活動

2.1 教材作成の方法

現在市販されている高校の世界史教科書のうち、東京都で最も多く採用されている教科書が山川出版の『現代の世界史A改訂版』と、帝国書院の『明解新世界史A新訂版』であることから、この二つの教科書の、第二次世界大戦後から現代にいたる部分の、太字になっている重要語を抽出した。次に年代と地域から15の部分に整理（表1）し、それぞれの重要語をすべて用いた説明文（資料1）を作成した。

【表1】

| | 年 代 | 地 域 |
|---|-------------|-----------|
| ① | 1945～1960年 | 全般 |
| ② | ～1960年はじめ | アジア |
| ③ | ～1960年はじめ | 中東・アフリカ |
| ④ | ～1970年はじめ | アメリカ・キューバ |
| ⑤ | ～1970年はじめ | 西ヨーロッパ |
| ⑥ | 1950～1960年代 | ソ連・東欧諸国 |
| ⑦ | 1940～1950年代 | 日本 |
| ⑧ | 1970年代 | アメリカ |
| ⑨ | 1980年代 | ソ連・アメリカ |

| | | |
|---|---------------|------------|
| ⑩ | 1990年代 | アメリカ |
| ⑪ | 1970～1990年代半ば | 西ヨーロッパ |
| ⑫ | 1980～2000年 | ソ連・東欧諸国 |
| ⑬ | 1970～1990年代半ば | 中東・アフリカ |
| ⑭ | 1970～1990年代半ば | 南アジア・東南アジア |
| ⑮ | 1970年～2000年 | 東アジア |

【資料1】¹⁾

1979年、ソ連のアフガニスタンへの軍事侵入をきっかけに、米ソの対立が緊張化した。アメリカのレーガン大統領が軍備を強化するなど「第2冷戦」と呼ばれる状況になったが、深刻化しなかった。両国の不況に加え、西側陣営では経済危機後の対応の違いなどから、アメリカと日・欧との間で経済摩擦などの問題が生じ、終末でできなかったためである。一方、東側陣営では、ソ連による東欧諸国への経済的締め付けを強化したため、東欧諸国のソ連離れが進んだ。ソ連国内では70年代初めから始まった経済の悪化に加えて、官僚の腐敗、軍事費の増大と消費材の不足などにより、行き詰っていた。1985年に登壇したゴルバチョフ書記長は、経済的停滞を打破しようと、グラスノチ(情報公開)やペレストロイカ(立て直し)を開始し内政の転換をはかり、1987年には中距離核戦力(INF) 全廃条約が結ばれるなど米ソ関係も改善された。このような動きは、冷戦構造終結へつながった。

そして15の説明文をもとに以下のポイントを取り入れた教室活動のメインとなるタスクシートを作成した。本活動は、現代史理解を目的としたが、歴史教育を主眼としたのではなく、活動は「講義を聞きとる」「既存知識と結びつける」ための支援であり、それぞれにいくつかの練習がある。

【表2】活動のポイント²⁾

| 講義を聞き取る | | 既存知識と結びつける | |
|---------|-----------------------------------|------------|--|
| ① | 用語を聞き取って分類する | ④ | 中国出版の世界史の教科書から重要用語と説明文に該当する部分を抜粋したものと、日本語の用語を一致させる |
| ② | 前回の授業に関連した事項の説明を聞きながら書き取る | ⑤ | 地図を示して地名や出来事の起こった場所などを確認する |
| ③ | 用語の読み方を正確に覚え、発音やイントネーションを意識して発表する | | |

1) 説明文の一例で、1980年代のアメリカとソ連である。下線は重要語である。

2) このポイントは2009年度版を改善して作成したものである。

「講義を聞き取る」ための支援には3つの練習がある。①は用語を「人物」「地名」「出来事」「思想や政策」「組織」等の種類に分ける活動である。歴史用語の意味を覚えるのは講義理解のためには必要なことであるが、1つずつ全て覚えるのは大きな負担である。そのため、少なくとも用語がどのような種類のものであるのかを考える活動を取り入れ、用語を理解するための第一歩となるようにした。2010年度の活動では、講義理解の支援を意識し、聞き取りによる種類分けを行った。用語の種類を推測できれば授業後に調べやすくなり、講義の流れを理解する上での妨げとならず、スムーズに聞き取れるようになると考えた。②は、講義では、自然なスピードの中で必要な情報を書き取る能力が求められるため、それらの支援となる活動を行った。2010年度は講義理解の支援をさらに意識し、教師がレジメをもとに前回の授業に関連した事項の説明や解説を行い、そのメモ取りとそれに関連した質問に答えるという形式にした(資料2)。

③は、活動の2つのポイントの両方に関係があり、その意図は2点ある。1点目は、固有名詞の読み方を正しく認識することである。特にカタカナ語の用語は日本語の音韻体系に従った日本式の読み方であり、既存知識と結びつきにくいいため注意を喚起した。例えば、アメリカのレーガン大統領の「レーガン」は中国語では「里 根 lǐ gēn リーゲン」と発音されるため、「レーガン」と聞いても既存知識にある「レーガン大統領」とは一致させるのが困難だと思われる。2点目は、歴史の流れを理解する上で用いられやすい言葉の理解を促すことである。特に中国の学生は、漢字を見て類推しがちであるため、読み方を正しく認識する必要があると考えた。例えば、歴史の教科書によく出てくる「調印」という言葉は、中国語では『公文書に署名する』という意味にはならず、意味不明な言葉になってしまうため、そのまま漢字で理解しようとすると、誤解につながる。日本語での読み方を正しく認識しないと、講義理解を妨げる大きな要因となる。2010年度は、講義でよく行われる発表やディスカッションといった活動の支援を意識し、用語の発音やイントネーションの仕方も学習した。

「既存知識と結びつける」ための支援には2つの練習がある。④の練習をするにあたって、中国本土で最も使用されている『全日制普通高級中学教科書世界近代現代史』という教科書から15の説明文に関連する部分の中国語の記述を取り出し、教材に加えた。2010年度は、ただ中国語の記述を載せるだけでなく、その記述と日本語の用語とを一致させる活動を行った(資料3)。日本と中国の教科書には様々な違いがある。大きな違いの1つとして、中国の教科書では用語という形ではなく、その内容が記述されていることが多く見られる。例えば、ゴルバチョフ政権登場後のソ連における改革運動である「ペレストロイカ」という言葉は、日本の教科書にはその言葉が提示されているが、中国の教科書には、「ペレストロイカ」という言葉は載っておらず、その内容の説明がされているだけであった。つまり中国からの留学生は、「ペレストロイカ」の意味は理解していても、用語そのものを知らない可能性がある。同様に、「サンフランシスコ条約」や「ニクソンショック」も登場するのは用語ではなく記述のみである。そのため、中国の教科書の説明記述とそれを示す用語とを一致させることによって、既存の知識と結びつくと考えたのである。

⑤は、地図を提示することにより、学生の既存知識と結び付けられるようにした。例えば地名は、日本語での表現ではわからなくとも、地理的な場所は把握している可能性がある。場所を示すことで、自分の知っている表現と日本語の表現での地名を一致させることができ、理解しやすくなる。また、歴史を動かしている要因は様々なものがあり、位置関係や資源、気候なども含まれる。そのような要因を理解する上で、地図の果たす役割は大きいと考えた。

【資料2】

⑨復習聞き取り問題

■メモをとりながら、先生の話聞きましよう。あとで質問します。自分のメモを見て、答えをリアクションペーパーに書いてください。

教師の話：「旧ソ連のアフガニスタン侵攻」について復習ましよう。どうしてソ連は侵攻したのか、その目的について話ましよう。

■ソ連のアフガニスタン侵攻の大きな理由となつたできごとは、隣国イランで何が起きたからでしょうか。

メモ

ソ連のアフガニスタン侵攻の理由

- ①東西冷戦
- ②アフガニスタンの政権
- ③隣国イラン

【資料3】

3. 次のA～Dの言葉と合う説明文を下の1～4から選びなさい。

| | |
|-----------|------------------|
| A 第2冷戦 | B アフガニスタンの軍事進入 |
| C 冷戦構造の終結 | D ペレストロイカとグラスノスチ |

① 東欧劇変和苏联解体后,美国成为世界上惟一的超级大国,两极对立的世界政治格局随之结束。两极格局结束后,世界形势的总趋势是走向缓和,但天下并不太平,明显呈现出缓和与紧张、和平与动荡并存的局面。(P106)

② 苏联在亚洲和非洲进行了一系列扩张活动,特别是1979年对阿富汗实行军事占领,直接威胁海湾地区和印度洋地区。(P86)

1981年里根担任美国总统后,对苏采取强硬态度。在争夺第三世界方面,美国立足于在军事上打小规模局部战争,以此作为排挤苏联势力的主要手段。在核战略和核军备各方面,美苏从数量竞争转为质量和技术竞争。鉴于70年代苏联已经在战略核武器的数量方面赶上美国,美国打算通过以高技术为核心的一轮军备竞赛,拖垮经济力量相对落后的苏联。为此,里根于1983年提出“战略防御计划”,即所谓的“星球大战”计划。(P87)

さらに2010年度は学生に歴史学習の必要性自体を認識してもらう工夫もした。2009年度にこの活動を行った際に、特に理系の学部を志望する学生が、歴史の学習が受験科目にないことから消極的であったため、近現代史は現代社会を理解する上で必要とされる知識であり、歴史とは直接関係のない講義であってもよく触れられるという認識を促す必要性を感じた。上記を踏まえ、具体的に一連の授業の初日にイントロダクションとして実施した教室活動は、①各大学のアドミッションポリシーの紹介、②日本留学試験の総合科目について、③東京大学web講義「『5. エネルギー・地球環境問題：経済学からみると』経済発展との関連で」の視聴とノートテイキングの3種類である。

①は東京周辺の5つの大学のアドミッションポリシーの紹介である。別科生の目的は進学であるため、大学側が幅広い関心を持つ学生を希望していると知ることは、この授業で歴史を学ぶ上で大きな動機となると考えた。②は進学を目的とする学生の大半は、日本留学試験の「日本語」と「総合科目」を受けているが、その「総合科目」対策としての授業は、留学生別科においては特別に設けていないため、関連のある授業はこの時間だけであることを説明した。③は、歴史そのものの授業でなくとも、歴史に関連する内容が出現する可能性があると認識してもらうために、Webで公開されている授業を視聴し、ノートテイキング、解説を行った。

2.2 教室活動の概要と調査方法

以下に2010年度の教室活動の概要と調査方法について述べる。

1) 教室活動【表3】

| | |
|----------------------|---|
| 実施機関 | 桜美林大学留学生別科 |
| 科目 | ニュースで学ぶ現代日本 |
| 期間 | 2010年4月6日～6月1日 |
| 学習者 | 中上級クラス 15名(全員中国出身) |
| 授業時間数 | 90分×6回 ・イントロダクション(90分×1回) ・タスクシートを使用した授業(90分×5回) |
| 扱った時代と地域 | ・1940年代後半～1950年代の日本 ・1970年代の北アメリカ ・1980年代のアメリカ・ソ連 ・1990年代～2000年代の北アメリカ ・1970年～1990年代半ばの西ヨーロッパ |
| タスクシートを使用した1回分の授業の手順 | ・予習資料配布 ・予習クイズ ・タスクシート ・復習を兼ねた聞き取り |

2) 調査方法

・授業前調査(45分)

イントロダクションを行った次の週に、高校の歴史教科書の太字の言葉を人名、地名、出来事などにグループ分けするという予備調査を行った。調査は、1. 言葉を見てグループ分けするものと、2. 言葉を聞いてグループ分けするものの二種類である。見て分けるものはさらに、1-1 言葉だけをグループ分けするもの(資料4)と、1-2 文中の言葉をグループ分けするもの(資料5)の2種類で、それぞれ10の言葉とした。一方、言葉を聞いて分けるもの(資料6)は15問で名詞+動詞の形で教師が読み上げ、その名詞の部分をグループ分けするというもので、大学の講義理解を意識したため、このような形式とした。

・授業後調査(45分)

最終授業の後で、予備調査と同様の調査を行った。ただし、問題数は予備調査より増やし1、2ともに20問とした。

・アンケート(15分)

授業後調査の後、この活動や世界史などについてのアンケートを実施した。

【資料4】 授業前調査 (言葉)

■以下の表の言葉は、世界史に関連するものです。それぞれの言葉が何を表しているのか、下のA~Fの中から選び、記号を書きなさい。Fの場合は、何であるのか記入しなさい。
 例)「キューバ」・・・地名 「キューバ危機」・・・出来事
 「キューバ」は、中央アジアにある島国の名前なので地名です。
 「キューバ危機」は、アメリカとソ連がキューバに設置された核弾頭を巡って戦争になりそうになったことなので「出来事」です。

| | |
|---------------------------------|--|
| † e f A a p o □ □ □ □ w o C □ □ | |
| ‡ A □ □ □ □ K □ □ □ | |
| こくさいれんごう † 国際連合 | |
| ぶんかだいかくめい † 文化大革命 | |
| † D f A □ % □ □ □ □ □ □ □ □ | |

:

A: 人名 B: 地名 C: 出来事 (事件や事実)
 D: 思想や政策 (考え方や政治的に決められたこと)
 E: 組織 (グループや集団) F: A~E 以外 ()

【資料5】 授業前調査 (文中)

①1987年には、**中 国 経 済 改 革 力 全 盛 期 勢** が 始 ま る と 大 き く 買 入 れ だ け
 考 え ら れ た。

②経済的発展のつきを速めるために、東南アジア諸国連合 (ASEAN) が 発 足 し、
 北 米 諸 国 が 参 加 し 始 め て い る た。同様に、東 南 西 洋 諸 国 の 経 済 協 力 を 目 的
 とし、

ア ジ ア 太 平 洋 経 済 協 力 会 議 (A P E C) が 発 足 し た。

③エジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化を宣布し、その後、
 イスラエルとの間に

第 二 次 中 東 戦 争 (ス エ ズ 戦 争) が 発 生 し た。

| | |
|-----------------|--|
| ① 中国経済改革力全盛期勢 | |
| ② アジア太平洋経済協力の会議 | |
| ③ 第二次中東戦争 | |

:

A: 人名 B: 地名 C: 出来事 (事件や事実)
 D: 思想や政策 (考え方や政治的に決められたこと)
 E: 組織 (グループや集団) F: A~E 以外 ()

【資料6】 授業前調査2 (聞き取り)³⁾

| 授業前調査②聞き取り 教師用 | | | | | | | |
|--|--|-----|----|-----|-------|----|-----|
| <p>■ 言葉を聞き取り、その言葉が何を表しているか、下のグループ分けの中に入れなさい。 これから言うことは、名詞+動詞の組み合わせです。その「名詞」の言葉が何を表すかを答えなさい。</p> | | | | | | | |
| 人名 | ①ミッテラン大統領 が登場する ⑦ブッシュ大統領 が就任する ⑫ゴルバチョフ書記長 に変わる | | | | | | |
| 地名 | ⑮東西ドイツ が統一する | | | | | | |
| 出来事 | ②第1次オイルショック が起こる ⑤ウォータージェット事件(が) 発覚する/起こる ⑨第4次中東戦争 を起こす/が起こる | | | | | | |
| <p><グループ分け></p> <table border="1"> <tr> <td>人名</td> <td>地名</td> <td>出来事</td> </tr> <tr> <td>思想・政策</td> <td>組織</td> <td>その他</td> </tr> </table> | | 人名 | 地名 | 出来事 | 思想・政策 | 組織 | その他 |
| 人名 | 地名 | 出来事 | | | | | |
| 思想・政策 | 組織 | その他 | | | | | |

2.3 調査の結果

授業前調査、授業後調査、アンケートを実施したが、協力者は授業前が11人、授業後は12人だった。

①言葉を見てグループ分けするもの(1-1)と文中の言葉をグループ分けするもの(1-2)

授業前、授業後のどちらにしても、1-1より1-2のほうが正解率が高かった。また、授業前と授業後と比較した場合、1-1、1-2共に顕著な変化は見られなかった。

②言葉を聞いてグループ分けするもの

調査で扱った20の言葉は全て授業で使用した言葉である。授業前と授業後の調査結果を比べてみると、授業前の平均正解率は58.3%で、授業後は80.6%に上がっており、平均23%の上昇率だった。

③アンケート

アンケートでは次のような回答があった。

「自国で世界史の学習をした経験はある」(12名中11人) 学生が大部分だったが、「歴史を勉強できた」、「知識が増えた」(12名中7名) などの回答が挙げられ、中には「中国の教科書にない内容を勉強した」、「いろいろなことが日本語で理解するようになった」という回答もあった。

難しさについては、「言葉、カタカナ」(12名中6名) を挙げた学生が多く、「人名・地名」、

³⁾ ここに示した調査用紙は教師用である。学生用のシートには表そのものがなく、教師の言葉を聞き取って、グループ分けの枠に入れる。

「何でも」、「中国の教科書の中で内容がない部分もある、聞いたことがない」、「量の多さ」「今の日本語のレベルでは難しい」などもあった。しかし、このような学習の必要性は感じている(12名中8名)学生が多く、日本史や古代史、世界史に対する学習希望も出された。

3. 日本史の分野を扱った教室活動

世界史の実践を重ねてきたが、2011年度は2010年度の反省を踏まえ、以下の2点に留意し、新たな教材作成、授業実践を試みた。第一点は、アンケート結果を踏まえ、日本史を学びたいという声に応えるべく、内容を世界史ベースから日本史ベースに変更したことである。日本史のみに限定したのではなく、日本史を理解する上で必要な世界の動きは押さえつつも、日本の動きを主幹とした。第二点は内容の難解さや日本語面の負担を考え、情報過多に陥らないよう、より平易でわかりやすい教材にしたことである。

3.1 教材作成の方法

日本史の教材作成の方法は次のとおりである。世界史では高校の教科書の太字を重要語として抽出し、説明文を作ったが、その結果必然的に内容・日本語両面の難易度が上がってしまったので、高校ではなく、中学校の教科書の太字の用語を集め、それを基に、説明文(資料7)を作成した。説明文の作成手順については従来と同様であるが、準拠する辞典を現在東京都で使用されている中学校の歴史教科書の中から採用数上位3冊(東京書籍『新編新しい社会－歴史』・帝国書院『社会科 中学生の歴史－日本の歩みと世界の動き』・清水書院『新中学歴史－日本の歴史と世界』)の第二次世界大戦後から現在にいたる部分にし、4つに区分した。それぞれは「戦後改革と国際社会への復帰」「冷戦とアジアの動き」「高度経済成長期の日本」「日本と国際社会の変化」である。

【資料7】

敗戦後、日本は、アメリカを中心とする連合国軍に占領された。日本政府は、**連合国軍総司令部(GHQ)**の指示のもとで、民主的な社会をつくるための**戦後改革**を進めた。経済の面では、多角経営を行い、日本経済を支配してきた**財閥**が解体され、資本を独占できないようにした。農村では、**農地改革**が行われ、多くの農民が自分の農地を持つようになった。1946年には、**国民主権、基本的人権の尊重、平和主義**を三原理とする**日本国憲法**が公布され、翌年、施行された。この憲法の前文には、**戦争の放棄**が宣言され、世界の平和を願う理想が掲げられている。この憲法のもと、多くの法律が改められた。教育の面では、民主主義を基本とする、小・中学校を義務教育とした**教育基本法**も制定された。

1951年、日本は、アメリカなど48カ国とサンフランシスコ**平和条約**を締結し、再独立を果たす。また、同時にアメリカとの間で、**日米安全保障条約**を結び、アメリカ軍の駐留などを認めた。ソ連とは、平和条約を結んでいなかったが、関係回復の動きがおこり、1956年、**日ソ共同宣言**が調印され、ソ連との国交が回復された。

次に、以下のポイントを取り入れたタスクシートを作成した。また、タスクシートは内容を理解し、用語を知る上で、必要なことを整理して提示すべく視覚情報も盛り込むようところがけた。

【表4】 活動のポイント

| | |
|---------|-----------------------------|
| 講義を聞き取る | |
| ① | 用語を聞き取って、分類する |
| ② | 前回の授業に関連した事項の説明を聞きながら書き取る |
| ③ | 用語の読み方を正確に覚える |
| ④ | 現在の生活との結びつきから、様々な社会問題を考えてみる |

上記は世界史での実践の踏襲であるが、今回は、「日本史」の分野を扱っており、日本史については国での学習がどの程度行われていたか確認できないため、世界史の分野でポイントとしていた「既存知識と結びつける」支援の活動は行わなかった。

以下の2点を変更させた。1点目は②の「説明を聞きながらの書きとり練習」であるが、2010年度のような説明文をさらに発展させた内容を聞き取るのではなく、前週に扱った説明文を、一つの質問に回答するために聞く、という形態とした。これによって、復習を兼ねられ、同時に講義という聞き取り場面を意識させることが可能になった。2点目は④という新たな視点を取り入れた活動である。これまでの歴史の実践活動において消極的な学生も見られたことから、近現代史の知識は現代社会を理解する上で不可欠だとそれぞれが実感する必要性を感じ、導入した(資料8)。歴史は単なる過去でなく、現在の生活に密接なつながりがあることを認識できるよう配慮した。例えば、日米安全保障条約や日ソ共同宣言から、現在の米軍基地問題や北方領土問題を考える活動等である。

【資料8】

5. 日米安全保障条約や日ソ共同宣言は、現在の日本とアメリカ、日本とソ連(ロシア)の間において多くの問題が残っています。どんな問題だと思いますか。

3. 高度経済成長期に日本人の生活は大きく変化しました。以下の写真を見て、気付いたことを話しましょう。

住宅



アゼリアネット (財)いけだ市民文化振興 落語みゅーじあむ

<http://www.azalea-net.or.jp/fakugcm1.html>

文化探訪台東区文化ガイドブック 下町風俗資料館

http://taito-culture.jp/customs/shitamachi/japanese/zoom_09.html

3.2 教室活動の概要と調査方法

以下に2011年度実施した日本史の教室活動の概要と調査方法について述べる。

【表5】 教室活動

| 実施機関 | 桜美林大学留学生別科 |
|--------------------------|--|
| 科目 | ニュースで学ぶ現代日本 |
| 期間 | 2011年6月22日～7月27日 |
| 学習者 | 中級クラス ⁴⁾ 15名(中国、ミャンマー、ドイツ出身) |
| 授業時間数 | 90分×6回 イントロダクション(90分×1回) ⁵⁾ タスクシートを使用した授業(90分×5回) |
| タスクシートで扱った内容 | ・戦後改革と国際社会への復帰 ・冷戦とアジアの動き ・高度経済成長期の日本 ・日本と国際社会の変化 |
| タスクシートを使用した 1回分の授業の手順 | ・タスクシート(上記4つのポイントを反映させた活動) ・復習を兼ねた聞き取り |

3.3 調査の結果

①言葉を見てグループ分けするもの(1-1)と文中の言葉を見てグループ分けするもの(1-2)

言葉をグループ分けする調査の結果、重なりのある全ての設問において正答率が上がっていた⁶⁾。特に顕著に正答率が上がったのは文の中に出現する言葉のグループ分けであり、平均正答率が44.3%から77.3%に上昇した。それぞれの学生の個人別正答率も、8割の学生が正答率を上げていた。

②言葉を聞いてグループ分けするもの

重なりのある設問は一問を除き、全て正答率が上がっていた。また、個人別に見ても75%の学生が正答率を上げている。

③アンケート

「このような歴史を扱った教室活動が必要だ」(15名中13名)、「歴史の勉強の必要性を感

4) 2010年度は中上級のクラスで実施したが、2011年度は中級クラスで実施しており、日本語能力のレベルが異なる。

5) 日本史を全く未習の学生も多くいることから、現代史に至る日本史全体の大きな流れを理解することを目標に児童幼児向け教材DVD(Nikk映像『知ってる?日本の歴史 時代の流れ編』)を用いた活動も行った。同時に、現代史についてもNHKデジタル教材「見える歴史」(『生まれ変わった日本』)を視聴し、現代史の大枠を把握する活動も行った。

6) 重なりのある用語とは授業前調査と授業後調査とで同じものである。重なりのない用語は授業後調査にのみ含めたものである。

じたことがある」(15名中9名)など、必要性を認める声が挙げられた。理由欄には「日本を理解する上で助けとなる」「進学後に求められる常識である」などの意見があった。難しさについては、「用語の読み方や難しさ」(15名中4名)、「出来事を覚える」(15名中2名)などがあるようだ。肯定的な意見が出ている一方で、「興味がない」「現代史と聞くと、抵抗感がある」「歴史はうそだし、自分の生活には関係がない」というようなコメントもあった。

なお、留学生別科で学期末に一斉に行われる授業についてのアンケートには「国で学んだ歴史を思い出す機会となり、良かった」「過去に学んだ歴史を日本語で学べて良かった」という声があった。

4. 今後の課題

以上2007年に行った調査をもとに始めた3年間にわたる実践について述べてきた。調査結果から、近現代史の用語に対する類推力が上がったと考えられ、一定の成果があったと判断できる。

しかし、課題も多い。まず活動の1つ目のポイントである「講義を聞き取る」という点であるが、実際の講義という場面で、本活動がどのように役立つのか、その成果が明らかではないため、講義というリソースを使って聞き取りの成果を見るなど、教室活動で行った練習の検証が必要である。実際に、調査結果において、聞き取って類推する点においては、文字を見て判断することよりも伸びが見られなかった。活動の適否を十分に分析する必要がある。次に2つ目の「既存知識と結びつける」ための支援について考えたい。今回扱った時代と地域には中国に関する部分はなかったが、別科では中国出身の学生がその多数を占めているため、中国に関する部分を取り上げ、その既存知識と結びつけることも考慮すべきだった。中国と日本の教科書の違いについては2-1で触れたが、その他に、日本の教科書の重要語のうち中国の教科書に、用語だけでなく、概念の記述そのものも全く出現しないものが多数あり、特に「思想や政策」に関するものについては見られないものも多かった。このような大きな違いがあるので、学生の既存知識がどのくらいあるのか、自国での学習内容について把握する必要がある。

また、調査方法も改善する必要がある。今回の調査で対象とした用語は数が少なく、また用語を分類する上での種類そのものにも問題があり、結果の分析が厳密にできなかった部分もあることから、調査方法については検討を重ねる必要がある。

今後は活動の検証を行い、課題を改善させるとともに、専門科目への橋渡しとしての支援のありかたを追求していきたい。

付記

本稿は著者3人の討議で進め、福島が1節、4節、伊古田が3節、太田が2節の執筆を担当した。